

TUFS 歴史・地域研究セミナー

第6回 Workshop for History and Area Studies



報告：泉田浩子（本学博士後期課程）

近世日本における北東アジア認識 — 明清交替期の韃靼漂流を中心として

コメント：ルシオ・デ・ソウザ（TUFS）

日時：2019年7月3日（水） 17:40～

場所：海外事情研究所 会議室（研究講義棟 427 号室）

主催：海外事情研究所ほか

セミナー後、意見交換会があります（軽食あり）。

明清交替期の韃靼漂流を研究対象として、一六四〇年代を中心に近世日本で「韃靼」と呼ばれた地域を、幕閣、外交を担当した藩の役人、また海外で見聞した漂流民がどのような思想的背景からそれを捉えたのかを明らかにし、一六四〇年代以降の「韃靼」呼称の使用の変化を考察する。

まず明清交替期の韃靼漂流の事実を確定するために、韃靼漂流の流布本を分類し、どのような経緯でそれらが作成されたのかを分析する。次に、幕府と宗家による国内での漂流民への対応、朝鮮との一連の漂流民送還をめぐる対外交渉の流れを整理する。そして、本発表の問題関心である日朝間の外交交渉の当事者であった幕閣、藩の役人と漂流民らが、どのような思想的背景から「韃靼」を捉えたのかを考察するため、漂流民、宗家使者、幕閣林道春（羅山）の関連史料を用い、それぞれの「韃靼」に対する解釈を考察する。最後に今後の展望として、本漂流一件以降の「韃靼」呼称の使用の変化を概観する。